2021年10月24日（日）主日朝礼拝説教

『あなたに欠けているもの』井上隆晶牧師
マルコ10章17～31節

❶【金持ちの青年に欠けていたもの】
イエス様が旅に出ようとされると、ある人が走り寄り、ひざまずいて尋ねました。「**善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。**」（10：15）ルカ福音書では「**たいへんな金持ち**」（18：23）で、「**議員**」（18：18）だと書かれており、マタイ福音書では「**青年**」（19：20）とも書かれています。お金、高い身分、若さ、良いですね。するとイエス様は「**なぜ、わたしを『善い』というのか。神おひとりの他に、善いものは誰もいない。**」（18節）といわれました。なぜ、イエス様はこんな答えをされたのでしょう。神様だけが善いお方で、人間は善い人はいないし、善い人にもなれないのだよ、と言っておられるように感じます。更に青年に向かって「**『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。**」（19）それを実践しなさいといいます。これは十戒の戒めです。すると彼は「**先生、そういうことはみな、子供の時から守って来ました。**」と答えました。驚きますね。十戒を守ってきたというのです。皆さんは守れましたか？聖書では「ばか者、愚か者」と言っただけで裁かれると書かれています。言葉で人を殺すこともあるわけでしょ。実際SNSの投稿で自殺した人もいます。この青年は、盗んだことも、嘘をついたこともないのでしょうか。この感覚の鈍さに驚きます。
すると、イエス様は彼を見つめ、慈しんで言われました。「**あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば天に富を積むことになる。それから私に従いなさい。**」（21節）財産を売って貧しい人に施すという慈善行為をしたら永遠の命を貰えるという意味ではありません。彼ができそうにもないことを言ったのです。案の定、彼はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去りました。彼が議員になれたのも親が金持ちだったからでしょう。彼からお金を取ったら身分も失うでしょう。彼は財産が支えだったからです。
では彼に「欠けている一つのもの」とは何でしょう。熱心さやまじめさですか？違います。彼は若いのに「永遠の命」を求めています。礼儀ですか？違います。彼は走り寄ってひざまずいて「善い先生」と言いました。いろんな解釈があるでしょうが、私が思うに、彼に欠けているものとは「**己を知らない**」ということだと思います。自分が善いことが出来ると思っているということです。

●古代ギリシャのデルフォイの町のアポロンの神殿の玄関の柱に「汝、自身を知れ」と刻まれており、この言葉をソクラテスは座右の銘にし、よく使っていたそうです。何千年も前から「自分を知れ」ということは言われてきたわけです。それだけ人間は「自分を知らない」ということなのだと思います。

❷【ラクダが針の穴を通る】
青年が去った後、イエス様は弟子たちを見回して言われます。「**財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。**」（23 節）これを聞いて弟子たちは驚きました。財産が豊かな人は神に祝福された人だと思っていたからです。イエス様はそんな彼らに更にこう続けて言われます。「**子たちよ、…金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。**」（25 節）エルサレムの城壁に「針の穴」という狭い門があったという人もいますが、ほとんど不可能だという大げさな表現だと思ってください。弟子たちはこれを聞いてますます驚き、「**それでは、誰が救われるのだろうか**」と互いにいいました。

●淀川キリスト教病院の柏木哲夫先生は本の中に、「死を受け入れやすい人は散らす人生を送ってきた人たちである」という研究データを報告しています。自分が持っているものを人に与えながら生きてきた人は死を受容しやすいというのです。例えば看護師さんや、ボランティア活動を懸命にしてきた女性の例が報告されています。その反対に「集める人生を送ってきた人たちはあまり死をうまく受け入れられない」というのです。その例として税務署の職員や政治家の例が報告しています。

イエス様は「**だれも、二人の主人に仕えることはできない。…あなたがたは神と富とに仕えることはできない**」（マタイ 6：24）と言われました。お金や富自身が悪いのではなく、悲しいことに、私たちは豊かになると自分が何か強くなったと錯覚して神に頼らなくなるのです。問題は私たち自身にあるのです。

❸【救いに関しては人間は何もできない】
財産のある者が神の国に入るのは難しい、と言われて驚く弟子たちにイエス様は「**人間に出来ることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。**」といわれました。これは神の国に入るのは人間の力では不可能だけれど、神様なら入れることができるという意味なのです。この言葉が私たちに教えているのは、**救いに関しては私たち人間にできることは何もないということです。私が頑張れば世界が変わるわけではなく、私がいくら努力したところで人が救われるわけでもありません。**人間の努力と文明の進歩によって未来は明るい世界になるなどとは聖書はどこにも語っていません。聖書が明らかに告げているのは、自然災害、戦争、分裂、反キリストの出現です。**神の国は下から来るのではなく、上から突然やってきます。私たちに出来るのは、目を覚まして神がして下さる救いを待つだけです。**では私たちが努力してこの世と人を愛する意味はどこにあるのでしょう。それは第一に、人に一生懸命関わることを通して、自分を知り、人を知り、神を知るためです。修道士たちは「自分から出たら誰に出会うのか。隣人と神に出会う」と言いました。人と関われば自分の無力さと愛のなさを知ります。その為にも一度徹底的に律法に従う、人と向き合ってみることが必要なのです。パウロもルターも徹底的に律法を守るという生活をしたので、守れない自分を知ったので

す。現実の社会で人と出会ってみましょう。そうすれば善人の殻などすぐに壊れてしまいます。そして出来ない自分のままでキリストに従うのです。昔の説教の中になつかしい文章がありました。

●私は先日、久しぶりに美しいものを見た。それは真理の為に、今まで自分がもっていた誤った教え、友人、生活、いっさいのものを捨てた悔い改めの涙である。彼女は自分の過ちを素直に認めた。そして涙を流した。一切を失い、裸になり、弱く、貧しくなった者が何と美しいことか。それに較べて、私たちキリスト信者の方が何と豊かになっていることか。この美しさの前に、私はひれ伏したい思いがした。逆に私の心の偽りが照らされた。彼女の心は天国に近く、私の心は天国から遠かった。彼女は後から来たが、私より先に行き、私は彼女より先にいたが、後になった。知識に於いて私は豊かであったが、「捨てる勇気、悔い改める力、貧しくなること」においては、私は貧しかった。彼女の方が知識に於いては貧しかったが、心の清さにおいては豊かであった。以前の私は美しかった。しかし、私は今、何と豊かになってしまったことだろう。ああ、神よ、私の魂が貧しくなりますように。私より美しい心と魂を持った人が、先に行きますように。私はそのような人に仕えますように。

第二に、神の恵みを無駄にせず、しっかり自分の中に入れるために、心を謙虚にするためです。天国に入ったのに文句を言う人になってはいけません。人はそのため土である自分自身を耕さなければならないのです。苦労して自分を耕した人は謙虚ないい顔になります。

カインは弟アベルを殺し、地上をさまよう者になりました。彼は「**私の罪は重すぎて負いきれません。**」と言いましたが、自分の罪が分かった訳ではなく、罰が重すぎると言ったのであり、他人がすべて恐ろしく見え、自分が殺されるのではないかという恐怖でいっぱいで、自分の心配しかしませんでした。でも、そんなカインが殺されることのないように神様は「**しるし**」をつけました。それが何なのか書かれていません。ただそのしるしの故に、本来なら死刑になるにも関わらず打たれなかったのです。黙示録ではキリスト教徒の額には「**神の名が記されている**」（黙示 22：4）と書かれています。私たちの額には「キリストの名」「十字の印」が記されています。誰も手出しをすることのできないようにです。金持ちの青年には「**イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。**」（21 節）とあり、絶望する弟子たちには「**イエスは彼を見つめて言われた。**」（27 節）とあります。二つの「**見つめる**」という言葉が出てきます。キリストは優しいまなざし、慈しみのまなざしで私たちを見ていて下さいます。悔い改めもできず、自分の罪も見えないカインが一方的に神に守られたように、私たちも一方的に赦され、守られているのだと思います。それに気づく私たちでありたいと思います。自分が小さくなり、神が大きく見えてくるようになりたいものです。